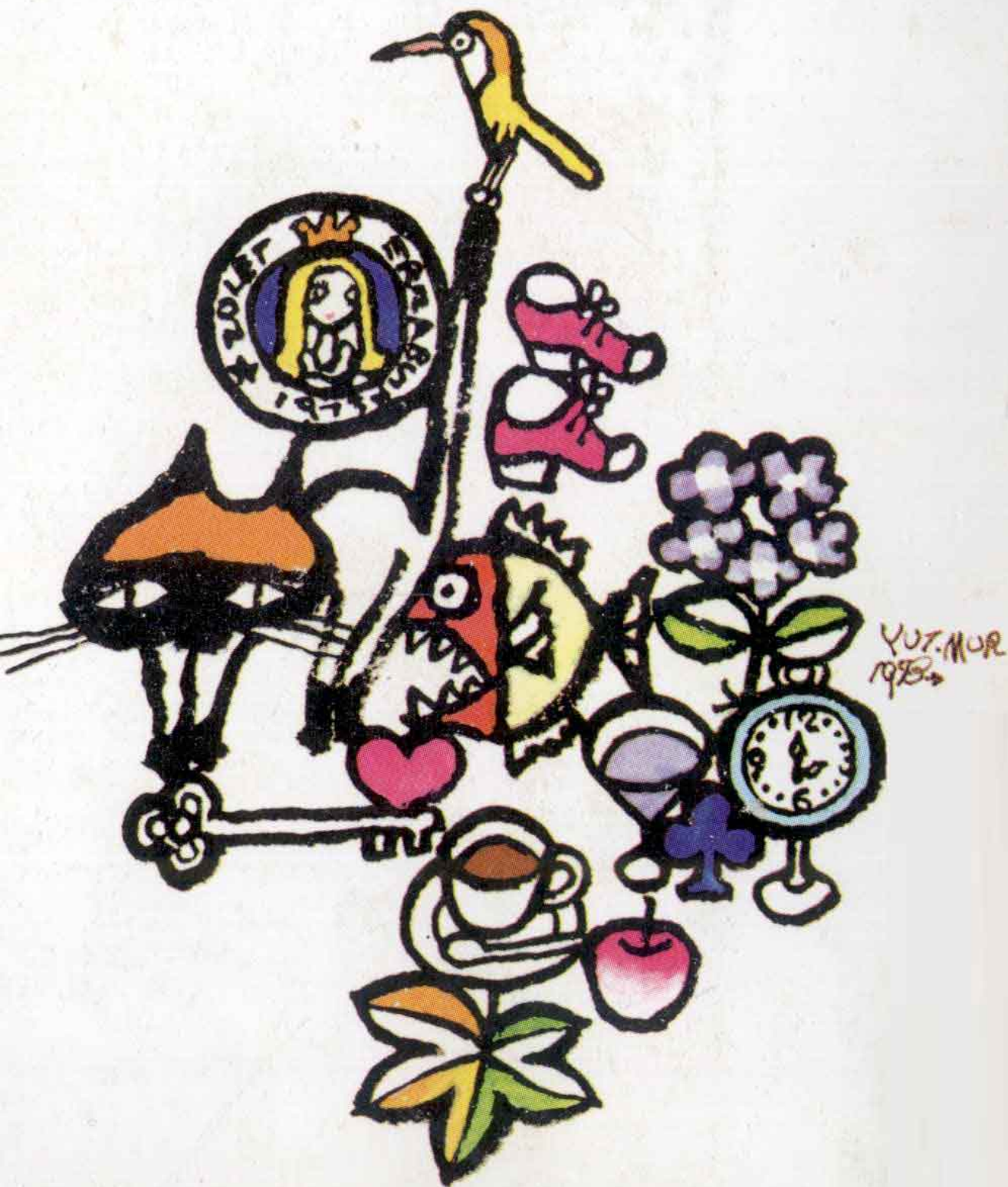
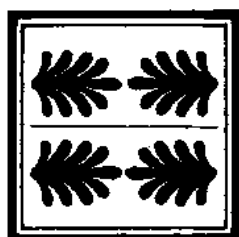


ノックの音が

星 新一





講談社文庫

ノックの音が

星 新一

昭和47年 8 月15日第1刷発行

昭和51年 9 月25日第23刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Shinichi Hoshi 1972

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

目次

謎の女	7
現代の人生	18
暑い日の客	29
夢の大金	40
金色のピン	51
和解の神	61
計略と結果	71
職務	83
しなやかな手	93
感動的な光景	105
財産への道	115

華やかな室 126

唯一の証人 137

盗難品 147

人形 157

解説／石川喬司 168

年譜 177

さしえ／村上豊

ノ
ツ
ク
の
音
が

謎の女

ノックの音がした。

ここはちよつと高級なアパートのなか。内部は和室と洋室、それにダイニング・キッチンと浴室から成っている。

ノックの音で、和室にひとりで眠っていた鈴木邦男は目をさました。としは三十歳。商業美術関係の仕事をしている。

邦男はいったん開きかけた目を閉じ、顔をしかめながら、手で後頭部を押さえた。ずきずき痛む。昨夜、飲みすぎたせいだな、と彼は思った。胸がむかつき、二日酔いの気分にあちがいない。だれと飲んだのかを思い出そうとしたが、それはだめだった。調子にのって、はしごをやってしまったのだろう。よくあることだ。

腕時計をのぞくと、お昼ちかい。あたふたと出勤しなくてもいい職業であることに、彼は感謝した。きょうは休むことにしよう。またも、ドアにノックの音がした。だれが来たのだろう。郵便配達だろうか。なにかの集金人だろうか、それとも仕事の関係者だろうか。

「ああ」

邦男は応答めいた声をあげたものの、まだ寢床のなかでぐずぐずしていた。二日酔いはいやなものだ。それに、急に高まった暑さのせいもあった。彼はタオルの掛けぶとんで、だるそうに顔の汗をぬぐった。

すると、ドアの握りが廻される音がし、だれかが入ってくる気配がした。昨夜、鍵をかけ忘れてしまったらしい。不用心なことだ。それにしても、失礼なやつだな。こう思いながら、邦男は視線をそちらにむけた。だが、その目は何回か激しくまばたきをし、最後に大きく見開いたままになった。

入ってきたのは、二十五歳ぐらいの女。しかも、美しい女性だったのだ。邦男の頭からは、痛みも眠気もいっぺんに消えた。

「あ……」

と言いかけて、彼はあとの言葉をのみこんだ。いや、なんと話しかけたものか、見当がつかなかったのだ。男がひとりで寝ている室に、遠慮なく入ってきた見知らぬ女に、どうあいさつをすべきだろう。

邦男は一瞬のうちに、知っている限りの女性を頭のなかで検討しなおした。しかし、そのどれにもあてはまらない。いったい、彼女はなにもので、なんの用で訪れてきたのだろう。彼はためらったあげく、寝そべったまま声をかけた。変に驚かさないう、気をくばった口調で言った。「あなたは、どなたですか」

女はべつに驚きもせず、複雑な笑いを浮かべながら応じた。

「そんなこと、おっしゃらないでよ。ねえ」

それには、なれなれしきとともに、押しつけるような響きがこもっていた。彼はつぎの質問を、さしひかえざるをえなかった。女がこれからなにをやるつもりなのかを、いちおう見まもろうという気になった。すると、さらに予期しなかったことが進行しはじめた。

「きょうは暑いわねえ」

こう女は言い、服を脱ぎはじめたのだ。はじらう様子はなく、いとも平然とそれがなされた。あまりに突然であり、また、あまりに自然であつたため、邦男は制止する機会を逸した。

下着だけになった女は、窓を少し開け、そとの風を迎え入れていた。また、ハンドバッグからハンケチを出し、肩や胸のあたりの汗を押さえた。

ひきしまったからだつき。若々しく白い肌。邦男は意識して目をそらせた。食い入るように見つめるわけにもいかないではないか。だが、だまつたままでは、気まづさが高まるばかり。それを追払うためには、なんでもいいから言わなくてはと思い、彼は声を出した。

「浴室のシャワーでもあびたら……」

暑いという言葉に応じたつもりだった。だが、こんなことを言ってよかったのかな。彼は気になり、途中で声を小さくした。へたなことを口にする、相手は急に怒り出さないとともに限らない。

しかし、そんな心配は不要だったようだ。

「そうするわ」

と、女は浴室のなかに消えた。やがて、水のほとばしる涼しげな音がおこった。だが邦男のほうは、いまの裸身にむかつて水が吹きつけている光景を想像すると、熱っぽく息苦しい気分になった。彼はその感情をつとめて振り払い、冷静さをとりもどそうとした。いまは、事態をたしかめるほうが先決だ。

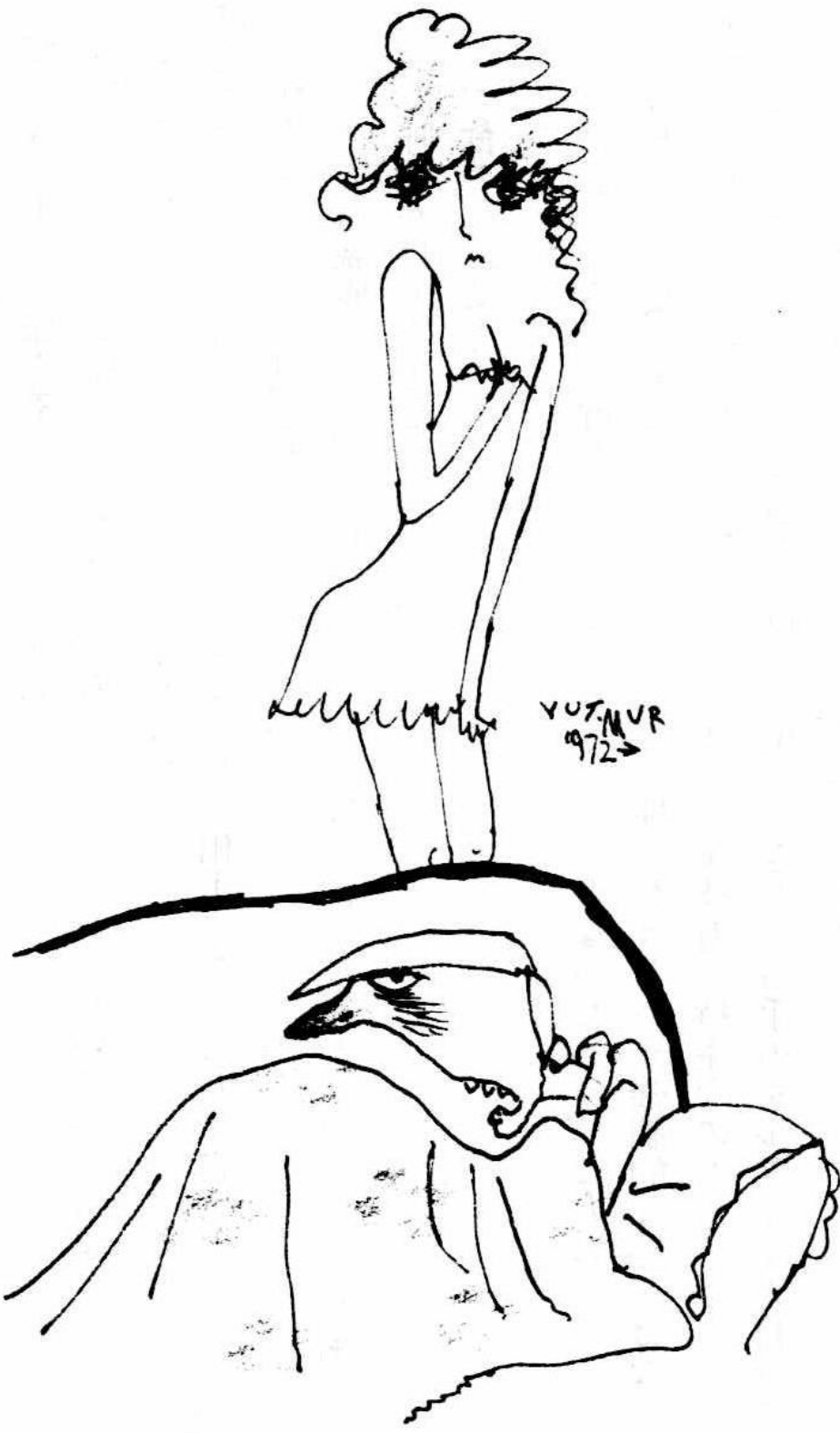
あの女はだれなのだろう。男ひとりの室に入ってきて、親しげにふるまう女。いかがわしい商売に従ってでもいるのだろうか。当然のことながら、この仮定が第一に浮かんできた。しかし、それはすぐに否定した。服装にも、化粧にも、それらしき崩れた雰囲気は少しもない。となる
と……。

その答えは、すぐには出てきそうになかった。せめてヒントでもあればいいのだが。

邦男はそつと起きあがり、置いたままになっているハンドバッグめがけて、しのび寄った。良心の苛責より、現状理解への好奇心のほうが強かった。開ける前にパチリと音がしたが、シャワーの音は相手に気づかせないでくれるだろう。

彼はなかをのぞいてみた。しかし、手がかりになるような品はなかった。手帖とか身分証明書とか、定期券といった品はなく、口紅とか財布のたぐいだけだった。財布もすばやく開けてみた。多くも少くもないといった金額が入っていた。

シャワーの音が弱まりかけたので、邦男はあわてて寢床へもどった。なにくわぬ顔でタバコに火をつけ、枕もとにある大きなガラスの灰皿に灰を落しつづけた。



浴室から下着姿の女が出てきた。肌がしっとり濡れ、さわったらひんやりした感触がありそうだった。彼女は、すぐに服を着ようともせず言った。

「ああ、さっぱりしていい気持ちだね。だけど、あたし、のどがかわいているのよ」

「冷蔵庫のなかに、なにかが入っているかもしれない」

と邦男は答えた。ほかに言いようもないではないか。相手にさからわずに応じていれば、そのうち謎のほぐれるきっかけが見出せるかもしれない。

キッチンのほうで冷蔵庫の扉の開く軽い音、センを抜く音、ビンとコップのふれあう音がした。また、女の呼びかける声も伝わってきた。

「あなたも、お飲みになる……」

「ああ」

邦男はつぶやくように答え、首をかしげた。どういふことなのだろう、これは。

押しかけ女房という言葉が頭に浮かんだ。しかし、押しかけという強制的な感じはない。もっと自然であり、なれなれしいのだ。それとも、よほどの演技力の持主なのだろうか。

女はジュースをみたしたコップを両手に持って戻ってきた。右手の歩きながら自分で飲み、邦男のそばにやってきてすわった。そして、左のをさし出した。

「冷えていて、おいしいわ。さあ」

邦男はちよつと震え、手を出して受取るのをためらった。女の顔には困ったような表情があら

われた。せっかく運んできたのに、という不満げな様子だった。しかし、それはすぐに消えた。仕方なく、女はコップを畳の上に置き、自分の顔を邦男の顔に近づけてきた。彼は呆然としていたが、すぐそばまで迫ってきて、気がついた。キスをするつもりらしい。邦男は少し顔をそむけた。そのため、女の唇は彼のひたいに触れた。

気が進まなくて拒否したのではない。相手は美しい女なのだ。しかし、いくらなんでも、不意に入ってきた見知らぬ女性、名前すら知らない女性と積極的にキスをするのは、ためらわざるをえない。警戒心をゆるめるのは、まだ早い。

巧妙きわまる、押しかけ女房作戦。その術中に簡単におちいってしまったのも、どうもしゃくだ。といって、そんな結果になってしまうのも、まんざら悪くはなさそうに思えた。純真そうであり、魅力的でもある。いくらか気の強そうなところもあるが、ものぐさな性格の自分には、そのほうがいいのかもしれない。

そばにすわっている女から、かすかにからだの匂いがただよってきた。邦男は相手に気づかれぬよう、そっと横目で眺めた。なめらかな肌が、すぐそばにある。彼は手を伸ばし、彼女に触れたい衝動を押さえるのに苦心した。また、そんな気持を相手にさとられぬよう努力した。

さわっただけではすみそうもないと、自分でもわかつているからだ。さわれば、さらに力を加えたくなるだろう。寢床に引っぱりたくもなるだろう。さらに……。

女の態度には、それを待ち望んでいるような気配さえある。その点に気づき、彼は冷静さを少しとり戻した。

どういふことなのだ。これでは、あまりに話がうますぎる。うますぎる話こそ、注意しなければならぬ。もしかしたら、なにかの目的を秘めた罫ではないだろうか。一線を越えかけたとたん、どこからともなくカメラのシャッターの音が響いてくるとか……。

そういえば、室に入ってきたとたん、女は窓を開けた。邦男は窓のほうに目をやった。しかし、夏空がひろがっているだけで、内部をうかがっている者もない。ここは三階であり、いまは昼間だ。窓の外にへばりついている人影があれば、まず通行人が見つけてさわざだしているはずだ。

邦男は女を正面から見つめた。その顔には、犯罪めいたかげは全くない。ついに彼は、そつけない口調で言った。

「ぼくがだれだか、ごぞんじなんですか」

「よしてよ、そんなことをおっしゃるのは。ねえ」

と、女は同意を求めてきた。「ねえ」という声には、説明不要という響きがあり、いくらか悲しそうな調子も含まれていた。

「ああ」

と答えはしたが、邦男には少しもわからなかった。自分ながら、うつろな声だと思った。だが、この事態をいつまでも謎のままにはしておけない。なんとか解決をつけないといけない。無理にでもだ。彼は頭をしぼった。

なにかの冗談なのだろうか。とつぜん女が笑い出し、解説でもしてくれないかと期待した。し

かし、いくら待っても、それはおこりそうにない。女にはどこか真剣さがあり、悪ふざけといったものは感じられない。

モデルか弟子入りの志願者なのだろうか。だが、それだったら、なににもこんな方法に訴える必要はあるまい。常軌を逸している。

そのほか、いろいろな場合を考えてみた。しかし、これはという的確な仮定は見出せなかった。邦男はふたたび聞いてみた。

「あなたはどなたなのですか」

「よしてよ、そんなおっしゃりかたは」

女はちよつとうらめしそうな目つきをした。依然として同じことだった。

どこかがおかしい。邦男はこう考え、今まで触れまいとしていた唯一の答えにたどりついた。おかしいのは、女の頭のなかなのだ。美しい顔の、うるんだような目、その奥に狂った妄想が存在しているとは、考えたくない気分だった。しかし、それ以外に説明のつけようがない。彼はいたわるような口調で言った。

「お医者さんに行ってみたらいかがでしょう」

そのとたん、女の表情に激しい変化がおこった。困惑したような、悲しいような、驚いたような感情があらわれた。

それから、女は眉を寄せ、じつと考えこんだ。なにを考えているのだろうか。狂った頭では、どんなことを、どう考えるものなのだろうか。邦男は少し緊張した。相手が予期しないような行動